岡山大学経済学会雑誌 55（2），2023，1～14

《論　説》

地方公共サービス革新プロセスの視座の構築

藤　井　大　児[1]・金　治　　宏[2]

1．はじめに

地方公共団体（以下，行政組織）が公共サービスを展開する際に，しばしば革新プロセスを経験する。ここで言う革新プロセスとは，直面する外部環境からの変革ニーズとそれへの応答プロセスである。しかもそのプロセスは，一回限りのものではなく，行政組織と外部環境との双方向的なフィードバック・ループを経るものだと考えられる。

本論文の目的は，この一連の革新プロセスについて，一定の視座を試論的に示すことである。行政組織と外部アクター間の循環メカニズムという理論化の方向性を詳しく検討するために，社会科学のかなり広い文脈で開発された異なるタイプの既存の文献を適用する。

第一に筆者の１人はかつて技術的イノベーションのメカニズムを研究してきたが，その分野には現象学的科学社会学から社会的構築主義にいたる思想的系譜があり，今日アクター・ネットワーク理論（Actor Network Theory, ANT）と呼ばれる諸研究に連なっている。ANTとそれまでの考え方との隔たりは，かつての（文化）相対主義と一定の距離を取った点，およびそのプラグマティックな姿勢であり，本稿の文脈でも有用性が高い。

第二に，起業家行動研究によると，私たちが今できることで未来を実現（エフェクチュエート）するという見方は，社会革新をめぐる新しい見方を確立するためにも魅力的である。少なくとも，「よそ者･若者･痴れ者」に社会革新のきっかけを期待するような，どこからともなく突然発生するものという認識からは一線を画すものである。

第三に，本稿は積極的にポストモダン思想に寄り添うが，特に輻輳した言説が相互作用する社会的現実をポリフォニーと見るならば，社会における少数者の意見にどう向き合うかについて一定の姿勢を示さねばならないと考えられる。その際，シビック・アントレプレナーの役割は決して小さくはないと論じる。彼らは少数派の意見に共鳴し，それらをより広い対話の文脈に持ち込むことができるからである。

あらかじめ述べておくけれども，本稿はいかなる事例にも当てはまるような汎用性の高い視座を目指そうとするのではない。理念型として，換言すれば骨太の論理としての有用性を求めつつ，その多様な論理的展開を多様なエピソードとともに示すことによって，現実の行政組織が直面する多様な状況への応用展開を可能にすることを目指すものである。

2．行政組織の革新プロセスに関する既存の論理

これまで提案されてきた中で，有用なベンチマークとなるひとつの視座は，外部環境が複数のアクターからなり，その時々の時代背景やアクター間の影響関係が，行政組織の構造や公共サービスの提供方法に

1）岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 教授
2）京都光華女子大学キャリア形成学部 准教授

影響を与えているというものである。以下の考察は，まず（文化）相対主義的な視座を行政サービスの開発プロセスに応用する。ANTの導入については後述する。ひとつの応用例として，イギリスの地方行政が1980年代から2000年代にかけて激しい抵抗を受けながらも行政改革を推進してきた経緯を整理すると，次のようになる。

1980年代にサッチャー首相をリーダーとする保守党政権が新自由主義を掲げ，自己責任と競争原理の導入に傾いていった時，深刻な景気後退に加えて様々な公共サービスの削減が国民生活を圧迫していた。もちろん国民の反発は大きかったけれども，国民ひとりひとりが稼ぐ力を身につけることによって国家を豊かにするという言説が，不満の声をかき消した時代だった。もちろんその声は，1990年代の労働党政権の樹立となって具体化された一方で，新政権の施政方針が大きく左派寄りに振れることもなかった。左派中道とも言えるトニー・ブレア率いる長期政権はアメリカとの蜜月関係を続け，新自由主義の路線をおおむね維持したと言える。1980年代のアメリカにおけるレーガノミクスによる規制緩和や大型減税がビジネス界に進取の気性を育み，皮肉にも1990年代の民主党政権時にITブームの実現や金融資本主義の確立に貢献した。イギリスも背中を押されて同様の方向へと大きく傾倒し，グローバリゼーションが一気に進展したけれども，1990年代アジア諸国のデフォルト危機，2000年代アメリカ国内における不動産バブル崩壊に由来する金融危機の影響を，イギリスも正面から受けることになった。グローバリゼーションへの部分的反発としてEU離脱運動があったと言えるかもしれないが，それでもなお規制緩和や歳出削減の手が緩められることはなく，現在の保守党を中心とした政権が続いていると言える。その期間，もちろん市井の民に降りかかった負担は小さくはなかった。しかし行政の財政出動を期待できないため，行政は民間活用，市井からは市民参画のアイデアが登場して，行政組織から供給されるはずの公共サービスの不足を補う動きが拡大したと考えられる。

公共サービスの需給問題を議論するうえで，強力な概念セットを用意したのは，政治学的な志向の強い経済学の諸派であったと筆者らは考えている。環境，厚生，公共といった連辞符経済学が戦後現れるなかで共通した問題意識は，消費者にとって事前に明らかな財の需要量と，生産者にとって生産方法が事前に明らかな財の供給量を価格メカニズムを通じて調整できる（はずだ）というごく限られた範囲の市場理論から飛び出して，もっと複雑で多面的な経済システムのより現実的な分析や経済問題の処方箋を目指そうとするものだったと考えられる。それらを雑駁に政治経済学として括ったとすれば，その論者たちにとって市場の価格メカニズムは社会を統治するうえで必要なメカニズムのひとつに数えられるに過ぎない。経営学者にとっては馴染みだったが，個人に主に焦点を当てた経済学では些事と扱われていた組織的な統治メカニズムは，アローやコース，ウイリアムソンらによって市場メカニズムと同等の理論的地位を与えられた。また政治学的概念であるはずのシティズンシップは，マルクス主義革命の担い手としてよりは，資源が限られている社会システムにとって重要な人的資源の基礎たりうるものとして再注目された。こうした政治経済学の諸派から供給される言説が，アメリカ・イギリスを初めとして，新自由主義を標榜する西側諸国に広く流通し，我が国で1990年代に矢継ぎ早に導入された規制緩和や歳出削減を巡る言説の中にも様々な言い換えを伴いながら登場したのである。自助･共助などという言葉はかつて聞かれたことはなく，中福祉中負担とあいまいな言説でお茶を濁していたものが，今やそれを隠すこともなくなったのである。

例えばニュー・パブリック・マネジメント（New Public Management, NPM）という概念の台頭がある。町田（2000）は，イギリス政府によって内閣府の内部に社会的排除対策室が設置されたことがきっかけとなり，地方分権と並んで民間の資源・能力の活用が推し進められたと述べる。具体的には，行政にはしばしば足りないとされる資源･能力を民間活用を通じて補おうとするものである。我が国でもプライベート･ファイナンス・イニシアチブ（Private Finance Initiative, PFI）方式として，広く見られるようになった考え

方でもあるが，イギリスの例ではもっと踏み込んだ改革が念頭に置かれており，政府の失敗理論（Weisbrod, 1977）と第三者政府論（Salamon, 1995）を背景に推進されてきたものと考えられる。その一例として町田は，ウェスト・ウォーカー地区の小学校で，新任校長を中心に，行政，地域コミュニティの構成員，子供の親などが協働して，年齢を問わず地域住民が活用できる地域教育センターへと発展させた事例を挙げている。

こうした分析例に示される通り，市場メカニズムを介してはしばしば供給不足となる公共サービスを，単にその費用負担を政府が肩代わりすることを避け，また硬直的となりがちな行政組織のサービス提供のあり方を改めるために民間活用を促すという大きな言説のもとで，自助・共助の精神を謳うことによって一般の市民をサービス提供の主体と位置付けて安価な労働力の確保が目指されている。また個々の問題解決に当たっては，問題に直面するコミュニティの構成員がそれぞれの立場から利害を主張するために，状況ごとに創意工夫がこらされてローカルな言説が作り出され，公共サービスの安定的供給が目指される。

また多様な構成員の主張を取りまとめるうえで，一定のリーダーシップは不可欠と言えるだろう。ウェーバーの正統支配の３類型論になぞらえれば，イギリスのようなもともと階級社会が構成されていた社会では，伝統的には地域の名士や長老のような存在があったかもしれない。ただし中産階級が膨れ上がった今日，市民意識の高揚を見て合法的リーダーシップの重要性は増しているだろう。そこで行政職員の役割が重視されるはずだけれども，もともと行政組織の硬直性への反省があったのであり，他方で地方の行政職員に特段のカリスマ性を要求するのも酷な話である。そこで法令上の制約の範囲内で，個々の状況に適合した裁量的な行政判断を行う第一線職員（Lipsky, 1980）の権能に，積極性，創造性，企業家精神といった特性・機能が期待されるようになり，Leadbeater and Goss（1998）によってシビック・アントレプレナー（Civic Entrepreneur）と名付けられた。彼らによれば「公的機関の内部で企業家精神を発揮し，組織内自己改革を行う人びと」と定義される。

ここで期待されるシビック・アントレプレナーの役割は，問題に直面するコミュニティの様々な構成員の間に，意見や利害の対立があった場合にはそれを議論・交渉を通じて折り合いをつけることである（藤井，2017）。ただしゼロ・サムのゲーム構造では，究極的には折衷や譲歩しか調整方法がない（分配的交渉という）。商取引の値引き交渉や交通事故の過失割合のようなもので，一方が受け入れ易い譲歩を，説得を通じて他方から引き出すぐらいのことしかできない[3]。より巧妙な交渉になると，交渉材料をなるべくたくさん交渉のテーブルに上げて，譲歩できるものとできないものを相互に見比べながら，双方にとって満足のいくパッケージを作るといった方法もあることはある（統合的交渉という）[4]。さらにそれよりも高度な交渉は創造的交渉と呼ばれて，双方の納得が得られる新しいソリューションを提示するものがあり，これが調停者の力量が最大限活きるやり方となる。

統合的交渉における交渉材料のパッケージというのは，交渉当事者が大事だと思うもののリストと言って良い。交渉材料のそれぞれが個々の当事者にとって何らかの意味や価値をもつ。その組み合わせは意味のネットワークとなり，要約的な概念を構成する[5]。こうした概念を表す言説が，交渉のプロセスで衝突したり矛盾を起こしたりする場合には，調停役の出番となる。双方に譲歩すべきところはしてもらいなが

3）例えば，貰い事故でも，こちらが完全に停車していないのであれば，少しだけこちらに過失割合が付くなどの話である。

4）例えばプロ野球の契約交渉であれば，契約金や年俸の他，契約期間や諸手当，福利厚生，契約後の処遇などを並べて，選手に雇われたエージェントと球団が話し合いをするだろう。

5）雇用条件の交渉であれば，収入面ではそれほど欲はないが，家族思いでプライベートな時間を大事にする「保守的な家庭人タイプ」もいれば，出世と金銭的報酬を重視して，通勤や生活の利便性のため職住隣接を希望する「キャリア志向タイプ」もいる。それぞれの生き様をコンパクトな言説に封じ込めることで，雇い主にとっては随分と交渉の手間が省けるというものである。

らも，それぞれが最重視する価値をうまく包摂する上位概念を創造することで，交渉をまとめ上げることが可能である[6)]。この上位概念の創造には，交渉の双方が有する意味のネットワークや価値体系を知悉し，現実の社会情勢やそれへの社会の対応，受け入れ可能な時間的スケールや資源的制約のもとで，より多くの人（特に交渉の当事者たち）の胸に響く，腹落ちする言説を構築する必要があり，ここで調停者としての力量が試されるのである。

特に受け入れ可能な時間的スケールや資源的制約という部分は，公共サービスの主たる担い手である行政組織の考え方や管理運営に大きく左右される。そして彼らはまた，地方議会，中央政府による指導・監督，立法府の定めるところによって有限の裁量権しか与えられていない。できる範囲で市民に一番近い行政組織の代表として方針を定め，公共サービスの供給に責任を負う。したがって個々の地域コミュニティが抱える問題状況に応じて適宜自分たち自身のありようを自己革新しつつ，手続的な合理性・正当性を保ちながら民間活力を後方から支援し，市民の自助・共助の精神に支えられた公共サービスの供給を目指す必要がある。地域コミュニティの現場と行政組織の狭間で，シビック・アントレプレナーたる第一線職員らの試行錯誤は続けられる。失敗もあろうが，他の行政組織にとってベンチマークとなるような事例も時に現れるだろう。そうした経験の積み重ねは，中央政府の指導・監督のもとで，類似した問題状況を抱える他の行政組織にも横展開されることで，次第に全国的な展開を見せることもある。企業家が率いる民間企業の成功事例が，市場メカニズムを通じて他社に模倣的学習を促すのとは異なり，中央政府の見える手による全国的な制度化という独自のメカニズムにより，行政組織のネットワークは，ゆっくりとだが着実に自己革新を遂げているのである。

3．新たな視座の構築に向けた一歩

以上のように，外部環境が複数のアクターからなり，その時々の時代背景やアクター間の影響関係が，行政組織の構造や公共サービスの提供方法に影響を与えているという至極自然な前提から，公共サービスの供給方法がどのように構築され，個々の問題状況に応じて多様化しつつ，そのうち優れたものについては全国レベルで制度化されるという一連の論理を組み立ててみた。ここで一部，補足した方が良いと考えられるのは，シビック・アントレプレナーの努力により，しばしば対立する言説の衝突が創造的に解消されたとして，それが直接的に行政組織の自己革新や民間活用の拡大を約束するとは考えにくい点である。

確かに話し合いのレベルでは，多くの人の意向が汲み上げられ，行政組織から資源的裏付けや手続的な合理性・正当性のチェックを受けつつ，シビック・アントレプレナーたる第一線職員の活躍で，民間企業

6）調停者が裁判官である興味深いエピソードとして，映画『揺れる評決』を挙げられる。最近も話題になったアメリカにおける妊娠中絶をめぐる合衆国最高裁の判断を取り上げた作品で，本編では架空の事件を題材に，堕胎禁止を違憲とした現実のロー対ウェイド判決（1973年連邦最高裁）を追認するか否かが争われる。堕胎禁止について，キリスト教的価値観や，憲法で保証された生存権を重視する保守派判事は合憲，女性の選択権を重視する革新派判事は違憲の立場を採り，キャスティング・ボートを握る新人判事が徹底した調査を通じて，子供の権利という新たな言説を構築する。子供の権利とは，1973年にヒラリー・クリントンが法律家としての論文で光を当て，現実社会においても比較的新たな概念であった。本編では望まれず生まれた子供の里親制度が不十分なために不幸な生活を強いられる子供の保護を目的に，子供の権利が胎児の生存権よりも重視されること（つまり，望まれぬ子供を増やさないために医療による一定の出産コントロールの可能性は残されるべきとする考え方），および女性の選択権は制約されるべきではないが簡単であってはならないこと（行政により医師を通じた届出やカウンセリングを義務とすること）と確認し，堕胎禁止を違憲と判示したうえで，さらに里親制度を拡充すべきだとして行政にその義務を明示した。このソリューションは，保守派にも革新派にも一定の妥協を強いながらも受け入れられ，反対意見は１名のみ（ロー対ウェイド判決には２名）というハッピーエンドへと収束する。また実際に1979年から80年にかけて，合衆国議会によって養子縁組支援・児童福祉法（Adoption Assistance and Child Welfare Act）が審議・可決されている。しかし現実を振り返ると，2022年６月の連邦最高裁判決はロー対ウェイド判決を破棄し，再び堕胎禁止を合憲とする判断を下した。アメリカ社会の多様な価値観が容易にすり合わせできるものではないことを物語っている。

や市民を巻き込んだスキームを構築できたとしよう。集団による参加的な意思決定は，一般に結論を参加者に受け入れられ易く，また参加者の多様性は意思決定の質に貢献するとも言われる[7)]。ただし意思決定の瞬間から実施に至るまでに，一定の時間が経過するのは不可避であり，問題が提起されて議論が展開される時の熱気は次第に失われる。行政組織の内部では，自己革新のきっかけは得られたとは考えられても，予算確保や組織の機構改革，外部組織や民間企業との契約交渉などがすぐに実行に移されることはないし，仮にうまくサービス提供まで漕ぎ着けたとしても，そのスキームが永続するかどうかは不確かである。さらに市民の自助・共助に支えられているため，彼らの動機づけがうまくいかない限りはそのスキームは絵に描いた餅となる。地域住民の民意を醸成し，動機づけを行い，またそれらが原動力となって地方議会や行政組織の自己革新を実現するためには，人々の気持ちの衰え，その維持・再活性化という問題を避けられない。本稿が革新プロセスが一回限りのものではなく，行政組織と外部環境との双方向的なフィードバック・ループを経るものだと考える理由はここにある。

Sarasbathy（2008）による企業家行動の議論は，ここで参考になる。彼女のエフェクチュエーション（effectuation）の議論は，ビジネス教育における伝統的な考え方，すなわち事業体の環境分析と内部の資源・能力の分析を通じて戦略立案することで，事業創造の成功確率が上がるという発想を批判する。彼女はこれをコーゼーション（causation）と呼ぶけれども，その直訳は因果関係であり，適切な成功パターンを探せば見つかるという信念に裏打ちされている（少なくとも，そう含意が込められている）と推察される。しかし彼女が言うまでもなく，新事業の創造プロセスで，どこまで既知のことがあるか，ないしは調べればわかることなのかは，コーゼーションが想定するものよりはるかに少ないだろう。それはリスキーという段階を超えて，不確実である[8)]。将来起こるべき事象がどのような確率分布で起こるのかが事前に明らかではなく，企業家のその時々の選択によって影響を受けながら次第に起業家を取り巻く社会的現実が立ち上がってくる[9)]。本論との対応で言えば，程度の問題はあるにせよ，公共サービス供給のスキーム構築に関与するアクターらを取り巻く社会環境を調査・分析し，彼らが関心をもつ意味ネットワークや価値体系を知悉することで，より多くのアクターにとって小さな妥協と大きな満足を可能にするソリューションを創造することが目指される。まさにこのプロセスが，企業家が行きつ戻りつする起業プロセスと同じ循環的性質を帯びる。さらにその場合，シビック・アントレプレナーたる第一線職員に寄せられる期待は非常に大きいのだけれども，そもそもそのような創造性を一般的な行政職員に期待して良いものかどうかは，大いに議論の余地がある。またSarasbathyの調査対象となったのは，いわゆる連続企業家と言われる人々

7）石田京子氏（早稲田大学大学院法務研究科教授）による女性の社会参画をめぐる講演を参照。岡山市男女共同参画社会推進センター「さんかくカレッジ」第６回「司法におけるジェンダー平等－なぜ最高裁判事に女性が６人必要なのか？－」2022年９月18日，西川あいプラザにて。

8）Norris Kruger氏はその講演で「いくつか進むべき道があって，どれを進むべきかわからないならリスクの問題だが，数メートル先が霧に包まれて何も見えないのに進まねばならないのが不確実性だ」と述べた。日本ベンチャー学会起業家教育推進委員会「起業家教育に関する第９回分科会」2022年９月15－16日，AQUA博多 にて。

9）例えば，エフェクチュエーションの５原則を見ると，第１原則「手中の鳥」は，実現しようとする目的実現に必要な戦略を，限られた情報に基づく環境分析や未熟な技術的・能力的基盤に基づいて立案することをやめ，現在手元にある技術的・能力的基盤に基づいてできることから始めるというものである。第２原則「許容可能な損失」は一旦飛ばして，第３原則「クレイジー・キルト」は，できないことを追い求めるため周囲の利害関係者を無理に説得して巻き込んでいくのではなく，現有のメンバーで実現可能な目的を掲げることに改めるというものである。第４原則「レモネード」は，どのような状況も解釈次第では今後の梃子（レバレッジ）として活用しうるので，当初の計画通りに状況が推移しないことは必ずしも問題ではないというものである。第５原則「飛行機の中のパイロット」は，乱気流の中を進む飛行機のパイロットのように，なんとかやり過ごす（muddling-through）ことが大事なのであって，計画を粛々とミスなく実行することとは違うという原則である。最後に第２原則「許容可能な損失」は，そもそもリスクと呼べるほど事態は事前に明らかにはなり得ないので，いわゆる期待利益を計算して投資することは不可能であり，むしろ自社が許容できる損失の程度を自覚して，どこまでなら失敗して良いかを基準に意思決定すべきだという原則である。

であることにも注意を払う必要がある。行政職員に対して，いわばウェーバーの言うカリスマ的なリーダーシップを要求するようなもので，それが潤沢に供給されるとは言い難い[10]。

もう一点考えられるのは，統一的なスキームを多くのアクター間で共有できる可能性についての疑義である。公共サービスの供給スキームについて，関与する複数のアクターが合意に至るまでの時間的スケールは，必ずしも短期的である必要性がない。むしろ受益者のニーズが最初から顕在化することは稀かも知れず，また行政組織における手続的な合理性・正当性の確認作業や民間努力の技術的・能力的基盤の確立に長時間を要する場合もある。したがって上述のエフェクチュエーションのプロセスが長きに渡って必要とされる場合の方が多いのではなかろうか。

以上のようなエフェクチュエーションのプロセスが要求する，多数のアクターらの議論について，さらに踏み込んだ検討をしてみたい。先述の通り，公共サービスの供給スキームについて，関与する複数のアクターが合意に至るまでには，多くの時間を要する。むしろ意見が一致しないことの方が多いかも知れないし，受益者を含む多くのアクターに合意しやすい大きな言説と，問題状況に密着した個別具体的な言説とでは，合意形成の容易さは異なる[11]。したがって議論が結論へと収束することを前提とするより，議論のプロセスで多様な主張や価値観が併存することの方が常態であるとする見方が，より現実味をもつ。

バフーチンによるポリフォニー論は，もともとロシア文学批評に由来し，輻輳性（混み合うこと）と訳されている。社会的空間を劇場の舞台とみなし，そこに参加するアクターらの対話が共鳴して，社会的現実を浮かび上がらせるという視座である。筆者らの着想のひとつは，フィンランド発祥の精神医療の実践であるオープン・ダイアローグであった。これは統合失調症など，従来の投薬治療や施設収容などが中心的だった精神医療のあり方を大きく見直そうとする草の根的運動だったと言われる。患者の心を蝕む原因は，彼らを取り巻く社会的ネットワーク内部での心の声の輻輳性，ないしは個々の患者の認識と社会的現実とのすれ違いが負荷となることとされる[12]。

ポリフォニー論の元になったドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の舞台は，19世紀ロシアである。キリスト教と封建制が瓦解しつつあるロシアで社会規範が失われるなかで，善悪や幸・不幸の価値観が鋭く対立していた。貧困，病い，不平等が蔓延って，登場人物のそれぞれが自身の信念に基づき，強く幸福な時代の到来を願っていた。成金の新興貴族カラマーゾフ家の当主フョードルの死の犯人探しを主軸に，神とは，社会とは，人間の幸せとは何かを問う対話が繰り広げられるが，修道院での聖職者とカラマーゾフ家との宗教問答は，最も象徴的なシーンのひとつと言える[13]。元軍人の長男ドミートリィは腕っ節が

10）そもそも行政職員の給与体系から考えて，連続企業家並にリスクを冒して創造的なソリューションを必要とするような働き方は求められていないし，それを要求することは基本的には無謀である。

11）受益者はニーズ情報を発出するが，しばしば大袈裟で自分本位になりがちである。高齢者が家事の困難さを訴えるのは理解できるが，家事は家族や隣近所でやりくりするのが，少なくとも現在の我が国における大前提である。介護・支援の申請は行政による審査を経て等級が決められ，第一線職員たるケア・マネジャーが介護・支援プランを策定するのは，現場ニーズとコミュニティや社会全体の大きな言説とのすり合わせと見ることが可能である。

12）フィンランドの精神科病院で1980年代前半から行われ，主に統合失調症の急性期の患者を対象にした精神療法である。治療では，患者と主治医だけでなく，家族や友人・知人，看護師らを交えてミーティングを開き，対等に意見を述べ合う。入院日数の短縮や再発率の低下などの効果があるとされる。

とは言え，投薬治療など医学的な処置に完全に代替されることはない。そもそもフィンランド経済はソ連との関係が密接で，ソ連崩壊前夜にはフィンランドも財政危機に直面した。地方の精神病院の規模縮小が余儀なくされ，患者に対して家庭での療養が強いられたことがオープン・ダイアローグの始まりであり，医学的な根拠があったわけではない。現在では我が国でいう地域包括ケアの先進的な取り組みが行われているが，基本的に看護・介護の範疇で行われるもので，精神科医のパイヴィ・コンガスサヴィアロ氏（Päivi KÖNGÄS-SAVIARO）は「今日のオープン・ダイアローグは投薬治療と並行して行われるもので，それを医学的処置と捉えたことはない」と述べた。株式会社アトラス旅行主催2021 Onlineフィンランド精神医療視察「オープンダイアローグ」2021年３月22－23日。

13）最初の論争は，イワンが社会主義の台頭を匂わせた神学論争である。社会の治安維持に関して近代的国家のうちに教会が

強く，自分の欲望に忠実である。そのためには手段を選ばないという野生的なものの考え方で，後に父親殺しの嫌疑をかけられる。次男イワンは文筆業も営むインテリで，不幸が蔓延る社会において神は存在しないとの立場を取る。修道士見習いの三男アレクセイは敬虔なキリスト教徒であり，師であるゾシマ長老に心酔している。また奔放な父や粗暴な長男に対しても優しく従順で，彼らにとって唯一心を許せる存在である。後に父殺しの嫌疑をかけられた兄の潔白を晴らそうと奔走するのも，この三男である。

ポリフォニーの，社会はひとつの劇場で，俳優がそれぞれの想いを吐露し，それが混み合うことで複雑な現象となって現出するという考え方は，伝統的ロシア社会が近代化の波を受けて変質する様子にうまく合致するものだとは言える。他方で登場人物たちが本編の中で何かしら合意や結論に到達するということは，基本的にはない[14)]。むしろ多様な考え方や価値観が百家争鳴状態に陥っていた社会の混乱期を映し出したものと言えるだろう。したがって対話の目的は，たかだか数十年しか生きられない個々の人間がいかに生きるべきかをそれぞれが見つけ出すことであり，カラマーゾフ兄弟はそれぞれ別々の道を歩み出すことになる。その意味では，オープン・ダイアローグの手法もまた，個々の患者がそれぞれに自分自身を見つめ直し，医療者や家族，友人，同僚などとの関わり合いに変化を見込んだものである。標準治療のようなものがあるわけではなく，個々の問題状況に当事者たちがどう向き合うかが重要である。元患者たちもまた，経験者エキスパートとして一定の訓練を経てから支援のネットワークに組み込まれ，かつて助けられた者が助ける側に回るという形で自助・共助の精神が活かされている。

精神科医の斎藤によれば,「妄想というのは『モノローグ(独白)』。頭の中で一人で考えを膨らませていく」という[15)]。そして患者を「独白」から抜け出させるのが，周囲との対話だという。「この場で顔を合わせているメンバー相互の異なる視点がつながることが重要で，合意や結論は副産物」と見なされている。

また問題の外在化と呼ばれる手法が採られることもある。問題の責任を属人化しないための工夫であり，患者を病ませるようなドミナント（支配的）なストーリーから解放し，もっとましなオルタナティブ・ストーリーに置き換えると病気が治っていくという発想に基づいている。もっとましなストーリーは，必ずしも真実である必要もない[16)]。

問題行動に対する対話の効果について，幅広い分野でも説明が試みられている。オープン・ダイアロー

その一角を占めるようになるというある聖職者の著作に対して，イワンはそれが原理的に矛盾を孕み，教会が精神的支柱となって国家の地位を占めるのが論理的に必然であると反駁する。西ヨーロッパのように，近代国家が理性的な官僚主義のもとで逸脱者を社会から放逐したとしても社会不安が減少することはなく，逸脱行為を抑止するには心の中の良心に訴えるしかないとイワンは述べる。逸脱者への教戒を行う教会のみがそれを可能にするとゾシマ老師はこれに同調するが，イワンの本心が別のところにあるのがやがて明らかになる。長男ドミートリィの乱入やフランスかぶれの親類ミウーソフのやっかみによって不意にイワンが問い詰められ，神や永遠の命への信仰がない限り，何が正しくて何が逸脱かも明らかにはならず，無法状態こそが常態であるとの無神論ともアナーキズムとも取れる内心を吐露する。病身のゾシマ老師を気遣いつつ，アレクセイはイワンの慇懃な態度をハラハラと見つめるばかりである。

14）私見ながら『カラマーゾフの兄弟』は，19世紀ロシア社会の混沌を描く前編と，父殺しの謎解きの後編とに大きく分かれているように思われる。後編は，合理的な推論によって物語の帰結へと収束していかざるを得ないから，ポリフォニーとしての側面は後退すると考えられる。

15）保坂展人「『オープンダイアローグ』という『魔法の鍵』」HUFFPOST，2015年11月24日。https://www.huffingtonpost.jp/nobuto-hosaka/open-dialogue_b_8635268.html（閲覧日：2022年12月１日）

16）遺糞症のエピソードがよく知られる。小児精神科の領域で，トイレ訓練がうまくいっていない状態を指す言葉であり，問題の属人化とは子供に何らかの原因があるとする見方を指す。この場合には，患者である子供を治療することに集中することになるが，問題の外在化とはそうした立場を取らない。スニーキー・プーというこの世ならぬもののせいにすることで，親子の協働が生まれるとされる。我が国でも『妖怪ウォッチ』というアニメ・漫画作品に準えて「妖怪ウォッチ教育法」という用語も誕生している。製作にあたって「日常を舞台とした上で『小学生の悩み』を研究し，それを現代風の『妖怪』として具現化」したものと言われ，問題行動は妖怪のせいにすることで，親子で問題解決できる関係を目指すのである。ITmedhiaビジネスONLINE「ぜんぶ妖怪のせい？正しく使おう『妖怪ウォッチ教育法』」2015年１月６日，https://www.itmedia. co.jp/makoto/articles/1501/06/news044.html（閲覧日：2022年12月１日）

グに通じる「島根あさひ社会復帰促進センター」の「TC（Therapeutic Community＝回復共同体）」というプログラムを紹介したドキュメンタリー映画『プリズン・サークル』では，受刑者同士の対話をベースに犯罪の原因を探り，更生を促すことが目指される。受刑者たちはプログラムを通じて，民間支援員（心理療法士，社会福祉士など）の支援を得ながら，自身が犯してしまった罪はもちろんのこと，貧困，いじめ，虐待，差別といった幼い頃に経験した苦い記憶と向き合う。2009年２月から2019年末までに367名が参加し，再入所率が非受講者19.6％に対して受講者は9.5％だったと報告されている。

さらに分析的な説明は，例えば石井（2022）のルポルタージュからも得られる。「感情の細分化（emotion differentiation）」の理論を応用し，触法少年の再犯防止の試みとして，ひとつの感情のなかにも様々なバリエーションと大きさがあることを言葉で腑分けしていく対話的授業を受けることで，５年以内再犯率を平均５割から１割に低下させる事例を紹介している。

以上のような感情の制御の能力が，対話的学びを通じて獲得されていくことが重要である。その制御が問題行動の抑制ばかりではなく，学校での教科教育の成績にも影響するとも言われる（石原，2022）。思うように課題ができないことのストレスを制御したり，クラス内の人間関係をうまく維持したりすることで，結果的に学業成績が向上するという。この効果が上述のTCにおいて受刑者の社会復帰にさらに貢献するという側面もあるだろう。

以上のように，対話することの目的は，意見や利害の擦り合わせやその結論にあるのではない。敢えて大風呂敷を広げるならば，効率化や合理化，官僚主義的な手続的合理性･正当性といった当為の構造に人々を嵌め込んでしまうこととは正反対の営みである。その時々のローカルな問題状況へアクターたちが創造的なソリューションを求めるプロセスで，そうした構造が自明視され，意識にも上らなくなった日常に嵌め込まれた人々を，対話のプロセスを経て劇的ではないにせよ少しだけ解き放たち，そうしたプロセスへの信頼と希望をたおやかに束ねあげる。そうすることで，生活の質が高められると同時に，社会的革新のストーリーを突き動かすものとして，理論化することが可能なのではないか。

４．公共サービスの革新プロセスのための新たな論理

ポストモダン思想の特徴として，いかなるアクターもマクロ的な社会現象に対してアプローチする上で存在論的・認識論的に完全といえる方法を有してはおらず，それは幾千もの意味の糸を紡ぐことによって生み出される大きな糸束の流れとみなされるべきものとの認識がある。アクターは社会の中で分断され，多義性・不協和・無理解が人間社会の常態とされるけれども，他方でかつての構造主義に見られる堅苦しさからは解放されている[17]。

Latourらが提唱するANTは，伝統的な社会学的アプローチを，分析者が分析対象を神の視点から俯瞰し，その構造を観察し，一般通用性の高い構成概念で測定すること，またその帰結としてより優れた社会の実現のための政治的・工学的試みに参画することをよしとしてきた点から批判し，連関の社会学を構想する（Latour, 2005）。すなわち「社会」とはアクター（人と物の双方を含む）の働きかけにより遂行的（performative）に定義されるものという視点を有し，個々の現象を社会的現象としてカテゴリー化することもまたアクターの作用であるとする立場である。

17）社会を劇場の舞台とみなしたGoffmanの分析ですら，主意主義のよりラディカルな信奉者であるGlaser and Strauss（1967）の目には，不徹底であると映った。彼らは『アサイラム』（Goffman, 1961）への批評として「その生活は有意味で，理に叶っており，正常である」との認識に対して，社会学にとって古典的とも言える秩序問題に答えるために，フィールドから得た社会的現実の枝葉が，まるで彼が先見的に知っていたかのような視座に都合よく嵌め込まれたに過ぎないと批判的に述べる。

例えば栗原ら（2022）の動脈硬化の診療に関する説明は，動脈硬化という客観証拠の存在が患者グループを決めるわけではないとする。なぜなら実際の動脈硬化はその患者が亡くなって，解剖した時に初めて医師の眼前に現れるのであって，それ以前の診療プロセスにおいては，内科医，外科医，放射線医などのそれぞれの検査技法や治療技術の前にそれぞれの姿で現れているだけだからである。内科医にとっては比較的ゆっくりと進行し，血液検査から得られた数値やエコー検査などで存在が確認されるものである。外科医にとっては急性期の疾患として認識され，バイパス手術など侵襲性の相対的に高い治療を施されるべき存在である。放射線診断医にとっては血管造影剤とレントゲン撮影を通じて描き出されるのが動脈硬化の姿であり，カテーテルを用いてステントを留置し，梗塞を押し広げることが目指される。それぞれの動脈硬化は個々の患者の体調や既往歴によっても現れ方が異なるため，チーム医療が一般化した今日では，病院内部でそれぞれの専門家の像を組織的な連携戦術を駆使することでチームが崩壊することを防ぎ，ある意味でオーダーメイドともいうべき患者ごとの動脈硬化が認識される。これはチーム内の全員が合意することを保証するものではないし，また動脈硬化の患者グループには独自の遂行的な定義によって境界線を設定・維持することで，一般にいう動脈硬化という疾患の存在が再確認され続ける。

この見方は，動脈内部にあるコレステロールの梗塞の存在を否定するものでは決してないし，適切な病理診断と治療技術があれば，患者の痛み・痺れや間欠性跛行などは軽快するし，潰瘍・壊死といった最悪な事態は避けられる。むしろここで注目されるのは診療行為が遂行されるプロセスそのものであり，またそれが社会的現実として広く認識されていくという視座こそが，現象学的な科学社会学からANTが受け継いだものである。

本稿との関連でいえば，こうしたアクター間の連関の社会学を構想するうえで，動脈硬化の患者に限らず，行政サービスの受益者という重要アクターを欠いたままであってはならないという立場があり得る。しばしば生きる力が脆弱になりがちな社会的少数者や生活困窮者などは，大きな影響力を行使することはないかもしれない。しかし行政サービスを受けることで自分なりに現実に向き合っていくことで初めて，彼ら受益者は現実世界でイキイキと生きていくというプロセスを描くうえで，彼らを取り巻く家族，職場などの人間関係，彼らがアクセスできる資源，生活リズムなどがアクターとして，個々の受益者のストーリーを浮かび上がらせる。

先述の『プリズン・サークル』の監督である坂上は，その前作である『トークバック：沈黙を破る女たち』の中で，HIVキャリアの女性たちが演劇療法を通じて「世の中に物申す」ところまで立ち直るプロセスを描き出した。現在HIVの薬剤によるコントロールは寛解と言ってよい水準であり，かつてのように死を匂わせるようなものではない。しかしHIVキャリアが直面するのは，患者としての不安に加えて，そこに至るまでのトラウマや感染後の人間関係など社会的な複合要因による苦悩である[18)]。医師と演劇監督の指導・支援のもとで，彼女らが自作した詩と激しい身体・音楽表現が，生きるために選ばざるを得なかった沈黙を打破する。しばしば彼女らを傷つけた社会に対する申立ては，社会にとって１つのショック療法であり，それと同時に彼女ら自身のインテグリティを取り戻すプロセスである[19)]。アクターとしての彼女

18）参加者の多くは黒人女性であり，また薬物常習者だった。彼女らは薬物を購入するために，売春を生業とすることが多かった。窃盗などの常習犯として断続的に刑務所に出入りし，住所が定まらずにホテルやシェルターに身を寄せるしかなかった。他方で白人や日系人のように経済的に問題がなく，アクシデントによってHIVに感染する者もいた。教育水準も高く，定職にも就いているが，肉親や同性・異性の友人との関係構築に不安を抱えていた。岡山大学文学部プロジェクト研究「イメージの人文学」主催「『トークバック：沈黙を破る女たち』上映会＋監督トーク」2022年11月28日，岡山大学にて。

19）オーストリアの小さな村で生まれ育った女性は，アクシデントで感染したことを両親にも話せず，またアメリカでも異性とうまくコミュニケーションが取れなくなったことを悩んでいた。この演劇療法によって両親との話し合いが可能になったばかりか，幼少期の封印された記憶まで呼び起こすことに成功した。ただしその記憶は，インタビューの中で明かされることはなかった。

らの申立て，および彼女らの内なる癒しは，コインの表裏のような関係であり，また絶叫に乗せられた詩も，原始芸術を思わせるフェイスペイントも，床を踏みしだいて刻まれる脈動もまた，大きなストーリーをイナクトするために欠かせないアクターとしての地位が与えられる。

ポストモダン論者にとって，構造主義者が当為として措定した窮屈な社会的現実から，アクターの心理的エネルギーを解放すること自体が理論化のひとつの目標であったとするなら，ANTの視座は有益である。またいま我々が「できること」のうちに未来をエフェクチュエートするという視座は，突拍子もないところから湧き出すのでもない，社会の革新のもうひとつのストーリーを描き出すうえで非常に魅力的である。

富山型デイ・サービスの確立プロセスは，NPO法人という制度的枠組みすらない時代に，このゆびとーまれの設立者たちの全くの手弁当で始められたものだった（金治・藤井，2020）。児童，高齢者，障害者福祉の垣根を超えたデイサービスは，その提供者も利用者も，行政組織も地域住民も全く知らない手法だった。それを持続可能にするためには，シビック・アントレプレナーたる県職員の創意工夫が不可欠だったと同時に，そのイニシアティブによりこのゆびが全国的に知名度を上げ，世論が動くことによって様々な官僚主義的な手続きを克服していった経緯があった。また地域住民も，最初から歓迎的なムードとは言えなかったけれども，現在では近所の子供たちを交えて，利用者らが施設の周辺を走り回る様子がうかがわれる。

しまなみ海道の観光キャンペーンについて言えば，公式的なストーリーでは中村時広愛媛県知事のリーダーシップに光が当てられることは多いけれども，関係者に話を聞くと種々の異なる言説が聴かれる（中尾・藤井，2021）。「サイクリストの聖地」というコンセプトは，そうした輻輳的なストーリーの束のなかのひとつとして浮かび上がった一案に過ぎず，現在でも賛否両論がくすぶる。それでも産業都市である今治市民として，また高齢化した芸予諸島に住まう住民として従来の凝り固まった社会秩序に嵌め込まれた人々の役割演技は「サイクリストの聖地」というより大きなストーリーの中で解き放たれ，心理的エネルギーの供給源となる。

以上のように個々のアクターが対話プロセスでそれぞれに活気付くことと，それらが輻輳的に共存しながらもたおやかに束ねあげられるプロセスを，ひとつの視座に収めるための作業を最後に行いたい。

冒頭でも述べたけれども，公共サービスの資源的裏付けや手続的合理性・正当性を担保するのは行政組織であることに変わりはない。いくら歳出削減が必要とされていたとしても，また市民の自助・共助の精神により多くの期待が寄せられたとしても，行政の存在意義は個々人では十分な供給を受けられず，見える手によって生産・供給の制御が不可欠なサービスがあるからである。しかし市場の失敗とともに行政の失敗もあり得るために，その折衷案として，伝統的にはNPMやPFIなどの民間活用の方法が採用されてきた。これらは行政組織からその足りない能力を外部発注し，民間企業・団体がその対価を行政組織から受け取る形で公共サービスを供給するという考え方である。裏を返せば，本質的に行政組織がどんな公共サービスが必要かを知っており（少なくとも，その点について議会などで議論が尽くされており），またその資源的裏付けや手続的な合理性・正当性が確約されている場合にしか実現できない。一般市民の民意を醸成し，動機づけを行い，またそれらが原動力となって地方議会や行政組織の自己革新を実現するためには，新たに公共サービスをエフェクチュエートするプロセスを必要とする。

少なくとも富山型デイサービスやしまなみ海道の観光キャンペーンについて見ると，NPO法人の活用が見られるけれども，上述のようなPFI方式は採られていない。問題意識は漠然と共有されているけれども，行政組織から市井の人々に至るまで思い描くストーリーは多種多様である。またそうした輻輳的な問題状況では，行政組織はしばしば保守的な対応を取る。自己革新を必要と認識はしていても，彼らは議会やそ

の背後にある一般市民の声が一定程度まとまって伝わってこないと，身動きが取れないという側面があるからである。

シビック・アントレプレナーたる第一線職員は，こうした行政組織の癖をよく知っている。したがって最初から大きな仕事を民間に委託しようとはしない。NPO法人のような小回りが利き，事業体としての収益責任がそこまで厳しくない方が，試行錯誤的な活動をさせるうえでは都合が良い。第一線職員は，自分自身がカリスマ的リーダーシップを発揮する必要はない。あくまで行政組織内部の組織人としての能力こそが，必要とされている。カリスマ的なリーダーは外部発信に特化して，外部リソースや有意の人材とネットワークを構築し，魅力的なコンセプトによって支配的な言説の普及に努める。ここで意見集約や利害調整をして，最終結論を取り付ける必要はない。あくまで終わりのないエフェクチュエーションのプロセスの途上であるに過ぎないし，多くの言説が輻輳することの方が現実社会をよりよく写す鏡ということができる。

多くの場合は，そうした試行錯誤が一定のまとまった世論となることはないかも知れない。しかし第一線職員は，行政組織の独自のネットワーク構築を行って，これを支援することができる。国会議員，中央官庁の職員，時には皇室などのネットワークを活用して，これと見込んだ言説の魅力を，より広く普及させられる。広範囲に受け入れられた言説は，より確かな資源的裏付けや，行政組織の自己革新のきっかけとなり，試行錯誤の担い手だったNPO法人は，次第に公共サービスの主たる担い手として広く認められた存在となる。また他地域から視察団が訪れる，中央政府に様々な運営上の要望が伝えられるなどして，広域的な制度設計が行われると同時に，より確実な資源配分に預かることにもなる。

この段階に至ると，エフェクチュエーションのプロセスから，コーゼーションの段階へと進むと考えられる。外部環境や行政組織の内部資源の客観的な分析結果に基づいて，合理的な制度設計が目指されると同時に，個々の問題状況に応じた柔軟なソリューションの提示は困難になる。第一線職員の裁量権はかなり狭く限定されて，行政組織とサービスの受益者に挟まれて利害調整の役割が大きくなる。

5．おわりに

最後に，輻輳した複数の言説がどう相互作用するかについて，簡潔に議論しておきたい。基本的に個々のアクターは，独自のストーリーのもとで自分自身の生活基盤を築いている。それが誰か他者の指示・命令で容易に変質させられることは，あまり考えられない。もしも行政組織の公式的なスキームが決定され，その影響下にある地域住民が皆それに多かれ少なかれ従わなければならないとすれば，表面的に従うとか，制度本来の使い道とは異なる形で適応するといった態度で臨むだろう。ゴフマンが，全制組織の収容者が第二次適応を果たすと述べたことは，その一環である。ただしこのままでは，支配的な言説が構築されることを保証しないため，追加的な論理が必要である。

守矢･藤井（2018）は集団的意思決定における少数者の意見の取り込みについて，仮説を提示している。しばしば少数派が多数派の意見に接近していくことがあるが，この現象は同調圧力と呼ばれている。この圧力に抗うために，少数者の多数者に対する影響力を分析する際には，少数者の主張の「一貫性」が前提とされてきた。ただしその影響力がかなり小さいこと（モスコヴィチらの実験室実験では，影響ありの場合でも10％にも満たない），また現実社会においてそれが「頑迷さ」と紙一重であり，長期的な信頼関係の構築にとって決して良いとは言えない影響があるかもしれないとの批判が可能である。

Weick（1979）は，*Social Psychology of Organizing*の中で「組織内で上に立つ者は，彼らが優秀だったからではない」と述べる。すなわち組織内で広く浅い支持を得られる者こそが高い地位を獲得でき，そうで

あるがゆえに多くの政治的妥協を重ねることが多数派を構成するための必要条件となるとの認識である。

これを集団的意思決定の文脈に応用すると，少数派は資源的・情報的劣位にあって，いくら一貫した主義主張を展開したとしても，彼らの影響力は限られたものである。むしろ多数派の高い地位にその主張を届けることができるのは，多数派にいながら少数派と意見を共有する多数派内少数派の役割ということになる[20)]。

石田はフェミニズムの視点から法社会学的な考察を行い，集団的意思決定におけるメンバーの多様性は，意思決定の質を高め，結果をメンバーが受け入れ易くすると述べている。また法曹界で少数者である女性法律家は，最低でも３割に到達することで一定の影響力を発揮でき，それを下回ると男性からの同調圧力に流されてしまう可能性を指摘している[21)]。全くその通りだと同意する一方で，現実問題として法曹界の２割前後の女性専有率を３割に引き上げることは，短期的には困難だと言える 。短期的には少数でありながらも多数者に影響力を及ぼす方略も検討した方がよく，その際に男性側の女性側の考えに寄り添える人材を見出すことに力点を置くことができるだろう。

男女の例に限らず，多くの社会課題の解決を図ろうとすれば，簡単に意見の擦り合わせや利害調整が行われるはずはない。それでも一定の支配的な言説が一定期間，幅を利かせることはあるだろう。またコーゼーションの段階にまで到達して，広く制度化されて持続する場合もあるかも知れない。それでも必ず異なる（しばしば少数者らの）意見は社会の中で輻輳するはずで，それが鳴り止むことはむしろ望ましいこととは言えない[22)]。少数者の意見に寄り添い，彼らの意見が広い文脈での対話に引き上げられるうえで，シビック・アントレプレナーたる第一線職員の役割は，決して小さくないというのが，本論文の結論である。

参　考　文　献

藤井大児（2017）『技術的イノベーションのマネジメント：パラダイム革新のメカニズムと戦略』中央経済社.

Glaser, B. and G. Strauss（1967）*The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research,* Aldine.（後藤　隆他訳『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか』新曜社，1996年.）

Goffman, E.（1961）*Asylums: Essays on the Social Situations of Mental Patients and Other Inmates,* Anchor Books.（石黒　毅訳『アサイラム』誠信書房，1984年.）

石原　匠（2022）「SELの有用性について」岡山大学経済学部卒業論文.

石井光太（2022）『ルポ　誰が国語力を殺すのか』文藝春秋.

金治　宏・藤井大児（2020）「富山型デイサービスの挑戦：縦割り行政を打破する」『中京学院大学経営学部研究紀要』第27巻，pp.13-29.

栗原　亘・伊藤嘉高・森下　翔・金　信行・小川湧司（2022）『アクターネットワーク理論入門：「モノ」であふれる世界の記述法』ナカニシヤ出版.

Latour, B.（2005）*Reassembling The Social: An Introduction to Actor-Network-Theory,* Oxford University Press.（伊藤嘉高訳『社会的な

20）守矢・藤井（2018）は予備的調査を行い，大学生を対象にシナリオ実験（場面想定法）を行って仮説に対して弱い支持を得た。まだ調査設計が不十分であることに加え，シナリオ実験には固有の弱点がある。例えば沼崎（1995），沼崎（1999），沼崎・工藤（2003）などによれば，シナリオ実験は相対的に少ない情報によって被験者に強いバイアスを植え付ける，被験者が刺激に対して印象を形成するまでに時間を置かないため，そのことがその後の選択に影響するといった限界がある。シナリオ実験は実験室実験よりもリアルなストーリーを与えてそれへの反応を測定できるという利点もあるので，慎重な調査設計を心がけたい。

21）例えば石田らが行った「司法におけるジェンダーバイアスへの認識」に関する調査では，一般的に女性の方が男性よりバイアスがあると答えたが，個別の裁判プロセスに対する満足度の調査ではジェンダー・ギャップはないとの結果が得られたという。その解釈について石田氏は，女性は男性に比べて司法のプロセスを大人しく我慢してしまうからと述べており，もしもそれが事実だとすれば，女性比率の低さは問題と言える。

22）コーゼーションのプロセスで，こうした抑圧的な力が働くことは，『トークバック』取材中でも起こったという。演劇監督は当初女性刑務所にて演劇療法を実践していたが，次第にアメリカの多くの州で実践されるようになった一方で，刑務官による検閲などが始まって，継続を断念したという。HIVキャリアを対象とした活動は，医師からの要請によってたまたま始められたもののようだ。

ものを組み直す：アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局，2019年）
Leadbeater, C. and S. Goss（1998）*Civic Entrepreneurship*, DEMOS.
Lipsky, M.（1980）*Street Level Bureaucracy: Dilemmas of the Individual in Public Services*, Russell Sage Foundation.
町田洋次（2000）『社会起業家「よい社会」をつくる人たち』PHP新書.
守矢　翔・藤井大児（2018）「多数者内少数者の影響力：予備的考察」『岡山大学経済学会雑誌』第50巻，pp.1-10.
中尾　光・藤井大児（2021）「ビジネスケース：しまなみ海道の観光資源化」『統合科学』第１号，pp.21-28.
沼崎　誠（1995）「受け手が抱く印象に獲得的および主張的ハンディキャッピングが与える効果」『実験社会心理学研究』第35巻第１号，pp.14-22.
沼崎　誠（1999）「ハンディキャップの有無が能力認知に及ぼす効果：実験室実験と場面想定法の相違」『東京都立大学人文学報』第297巻，pp.25-39.
沼崎　誠・工藤恵理子（2003）「自己高揚的呈示と自己卑下的呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果：実験室実験とシナリオ実験との相違」『実験社会心理学研究』第43巻第１号，pp. 36-51.
Salamon, L.（1995）*Partners in Public Service: Government-Nonprofit Relations in the Modern Welfare State*, The Johns Hopkins University Press.（江上哲監訳『NPOと公共サービス』ミネルヴァ書房，2007年.）
Sarasbathy, S.（2008）*Effectuation: Elements of Entrepreneurial Expertise*, Edward Elgar.（加護野忠男・高瀬　進・吉田満梨『エフェクチュエーション』碩学舎，2015年.）
Weick, K.（1979）*The Social Psychology of Organizing*, McGraw-Hill.（遠田雄志訳『組織化の社会心理学』文眞堂，1997年.）
Weisbrod, B.（1977）*The Voluntary Nonprofit Sector,* D. C. Heath and Company.

Building a perspective on the innovation process of local public services

Daiji Fujii, Hiroshi Kanaji

Abstract

When local governments develop public services, they often experience innovation processes. More often, the innovation processes referred to here seem to be the perceived needs for transformation faced with external pressures and the purposive responses to them. This article tries to depict this discourse from a different viewpoint. One of the perspectives that has been proposed so far is that the external environments are made up of multiple actors, and that the historical backgrounds and the relationships between these actors affect the structure of administrative organizations and the methods of providing public services. The transformation processes could be one-time events no matter how long the processes may take, but this article tries to argue they may connote a circular mechanism where both of the administrative organizations and the external actors feedback to each other. In order to elaborate this direction of theorizing, three steps are employed by applying existent literature of various types developed in rather a broader context of social sciences. First, if one of the goals of postmodern theorization is liberating the psychological energies of actors from the cramped social reality that structuralists postulated, then Actor-Network-Theory may be useful. Second, according to Sarasbathy's research on entrepreneurial behaviors, the view that we effectuate our future through what we can do now is attractive in order to create a new discourse of social innovations, where we appreciate them as not springing out of nowhere all of sudden. Third, once this article accepts polyphonic views on social realities where congested discourses interact during abovementioned process, the role of civic entrepreneurs on the frontline can never be overstated enough. This is because such civic entrepreneurs could cooperate with minority opinions and raise them into broader contexts of dialogues within societies.

Keywords: local government, public services, innovation process